

華西医科大学口腔医学院 II



私は、2000年に成都を再訪した。空港からつづいたポプラ並木は、切り払われて高速道路に変貌していた。私、古屋英毅教授、小倉英夫教授は、華西医科大学創立90周年記念式典に招待された。その間に、私の名誉教授の称号授与式が組まれていた。長身のスマートな張肇達学長が、私を公用車の助手席に乗せて、自ら運転して式場へ案内した。欧米流の洗練された歓待ぶりに感じ入った。

15年前に姉妹校の調印をした曹澤毅学長は、その後、厚生副大臣に栄進して北京に赴任した。ところが天安門事件が勃発し、じきに失脚した。のちに、中日医学協会会長として来日し、久しぶりに再会を喜びあった。産婦人科医の彼は失脚中、北京郊外の病院の巡回手術をして糊口をしのいだ、という。

今回、口腔医学部長は15年余り勤めた王大章教授から、若い女性の周學東教授に代わっていた。中国では、学長や学部長になるのは共産党員に限られる。党員は現在8,260万人だから、13億人の僅か6%程という超々エリートである。くわえて、華西医科大

学では代々、口腔医学部長は卒業成績トップが就く。周學東口腔医学部長は、三十歳の俊英で元紅衛兵と仄聞した。

式典の合間に、私は張学長から名誉教授の学位記を授与された。当時、中国にも大学統合の嵐が吹き荒れ、抵抗空しく華西医科大学は、四川大学に合併吸収されると決まっていた。辛うじて四川大学華西口腔医学院の学部名が認められ、伝統ある華西の名称が残された。私は、「貴方は、華西医科大学最後の名誉教授です」と口々に祝福された。

ところで、私が1985年に初めて成都を訪れた折、朝方、ホテル周辺を散歩した。華西の公用車が右折する所を左へ曲がると、大通りの向う正面に大きな横看板『打倒侵略帝国日本』が目飛びこんできた。一瞬立ちすくんだが、公用車は私たちの目に触れないように回り道していたと知った。私は、そのときの王先生の配慮を今も忘れない。それから今日まで27年間、彼らと私たちの親交は途絶えることはない。

(写真 私の左隣は周學東口腔医学部長)